

## 平成 28 年の水稲における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応

県内の調査圃場（57 圃場）等の調査結果をもとに、本年の水稲における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応についてまとめましたので、参考にしてください。

### 1. いもち病

低温，日照不足，多湿等の気象条件で発生する病害である。葉いもちは例年梅雨入り後の 6 月下旬から発生し始め，7 月に最も発生が多くなる。その後，出穂期頃に降雨が続くと，穂いもちが多発生する。

#### [本年の発生経過]

6 月中下旬に感染好適条件が出現し（BLASTAM<sup>※</sup>による），7 月上旬の調査で，県内の広範囲に葉いもちの発生が確認された。その後，7 月は梅雨前線や湿った空気の影響で曇雨天の日が多かったが，7 月を通しての降水量は平年より少なくなり，7 月下旬以降の発生は平年よりやや少なくなりました。

出穂期頃の 8 月上旬は，気温が平年並～高く推移し，日照時間が平年並～多かった。そのため，8 月中旬以降は台風の影響で降水量が平年より多くなったものの，8 月下旬，9 月上旬の調査で穂いもちの発生は平年よりやや少なくなった。

※BLASTAM（ブラスタム）：気象条件から葉いもちの感染好適日を判定するプログラム。

#### [次作に向けた対応]

- ① 種子は必ず更新し，未消毒の種子を使用する場合は種子消毒できるよう準備する。
- ② 常発地では育苗箱施薬剤を準備する。

### 2. 縞葉枯病

ヒメトビウンカが媒介するウイルス病である。ヒメトビウンカの幼虫はイネ科雑草で越冬し，4 月上旬頃に羽化して麦畑へ移動，増殖した後，6 月上旬頃に成虫が水田に飛来する。水稲は，イネ縞葉枯ウイルスを保毒したヒメトビウンカに吸汁されるとウイルスに感染し，発病する。

#### [本年の発生経過]

8 月上旬には県北地域を除く県内全域で本病の発生を確認し，県全体の発病株率，発生地点率は H27，H26 に次いで高くなり，本年を含む過去 11 年間で 3 位となった。8 月下旬の発病株率は H27 よりも低かった。なお地域別の発病株率は，県西，県南，県央地域の順で高かった（表）。

表 8 月下旬における本田での縞葉枯病の発病株率及び発生地点率

地域	調査 地点数	発病株率(%)		発生地点率 (%)	
		H28	H27	H28	H27
県北	8	0	0.5	0	13
県央	15	0.8	1.1	7	20
鹿行	6	0	0.7	0	17
県南	19	2.1	6.1	32	47
県西	9	9.8	22.7	78	100
県全体	57	2.5	6.0	25	40

#### [次作に向けた対応]

- ① 収穫後は耕起してヒコバエをすき込むとともに，ヒメトビウンカの越冬場所となる畦畔のイネ科雑草の除草を徹底する。
- ② 発生の多かった地域では，ヒメトビウンカの防除対策として，育苗箱施薬剤を準備する。
- ③ 縞葉枯病抵抗性品種の導入を検討する。

### 3. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ等）

成虫は、水稻の出穂前は畦畔や周辺のイネ科雑草地に生息する。出穂とともに水田に侵入し、穂を加害しながら葉や穂に産卵する。孵化した幼虫も同様に収穫期まで穂を加害する。

#### [本年の発生経過]

水田内における発生は、7月上旬まで平年並であったが、7月下旬以降増加して平年よりやや多く推移した（図1）。特にクモヘリカメムシは、防除適期直前の7月下旬時点で県央、鹿行および県南地域を中心に発生が平年よりやや多かったため、8月1日に病害虫速報No.2を発表した。水田内における発生種は、調査期間をとおしてクモヘリカメムシが最も多かった（図2）。なお、県南地域ではイネカメムシが最も多かった。

#### [次作に向けた対応]

- ① 例年発生が多い地域では、水田内外のイネ科雑草の除草に努める。ただし、水田周辺の除草は水稻の出穂期近くになって行くと、斑点米カメムシ類を水田内へ追い込むことになるので、出穂期2週間前までに終わらせる。
- ② 幼虫を対象とした防除適期は出穂10～15日後頃（乳熟期）である。
- ③ 多発した場合は、②の時期に先立ち、穂揃期に成虫を対象とした防除を実施する。

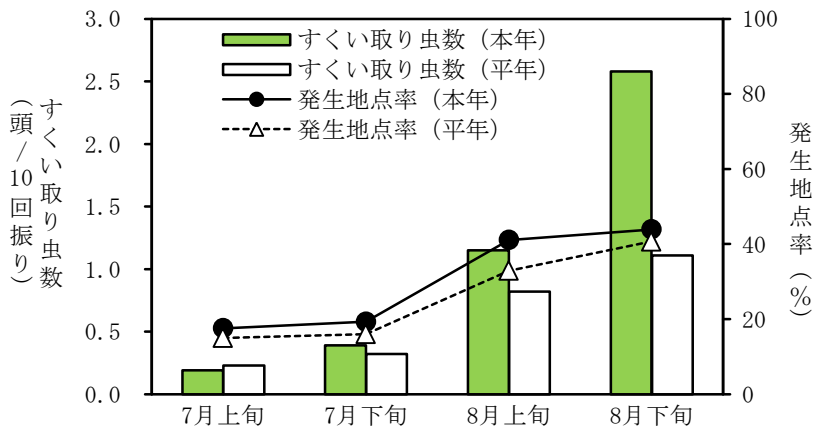


図1 水田内における斑点米カメムシ類の発生推移

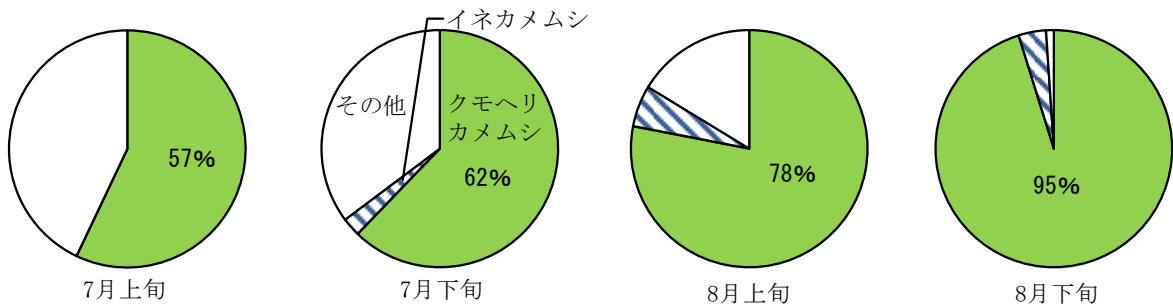


図2 水田内における斑点米カメムシ類の時期別種構成

※グラフ内の数値はクモヘリカメムシの構成比を示す。